

□東日本大震災における久慈消防署の 活動状況について

久慈広域連合消防本部

第一警防救急係長 久慈 剛 史

岩手県沿岸北部に位置する久慈広域消防は、1市1町2村で構成され、1消防本部、1署5分署、消防職員143名、消防団員1,746名で防火防災の任に当たっている。南北に約60kmの海岸を抱え、各地に30箇所もの漁港を有し、水産業の盛んな地域として、ウニ、アワビ、わかめ、ホヤ、さけ等の漁獲、加工業は全国的にも評価が高く、地域産業の活性化に大きく貢献している。海の恩恵は漁業だけではなく、リアス式海岸特有の地形と海岸に生植する松と絶壁の磯とのコントラストが大変美しいことから国立公園に指定されている。

—2011年3月11日14時46分:

地震発生—

地震発生時、多くの職員は2階の事務室で執務中であった。この時鳴り響いた携帯電話の緊急地震速報音「ギューギューギュー」は、この時を機に我々のトラウマとなった。この音は、皆に大きな地震を予測させ、一斉に立ち上がり身構え、また、一部の隊員は直ぐに走り出し出動態勢に入った。この時の久慈地方の震度は「5弱」であった。3分近く揺れは続き「長かったなー」「大きかったなー」と言うざわめきがあちらこちらから聞こえた。

—地震発生から3分後14時49分:

大津波警報発表—

揺れの収まりと同時に、北海道、東北地方の太平洋沿岸に大津波警報が発表された。「えっ」「またか」と思うと同時に、何かこれまでの地震と異なる胸騒ぎを感じた。

久慈港魚市場まで約700mに位置する久慈消防本部では、津波注意報・警報が発表になると、まず港周辺の水門閉鎖を行う。その後、地域住民に対し避難広報を行い、高台からの海面監視を行う。3月11日の初動対応も同様で、当直員12名の中から2小隊7名が海岸へと向かった。庁舎内では、防災無線による地域一斉広報を繰り返し併せて本部員による警戒態勢強化、第三次非常配備体制の発令、災害情報収集、庁舎被害の確認など全職員挙げて対応に追われた。



津波は巨大なエネルギーと化し町に襲いかかった(野田村)



地上施設が壊滅した久慈国家石油備蓄基地



8mの防潮堤に打ち上げられたタグボート

—地震発生から45分後15時31分:

—大津波来襲—

久慈湾に大津波が押し寄せ、出場している潮位観測隊2隊から15時20分に引き潮情報が入った。15時31分第1波来襲「沖の湾口防波堤を津波が越えて来た」更に「国家石油備蓄基地地上施設が壊滅状態」という情報が入って来た。言葉では言い表せないものすごい津波、興奮状態の隊員から次々とその被害情報が無線に入る。庁舎屋上の監視隊から「漁協の防波堤を津波が越えました。」と情報が入る。どんな時化でも波の届くはずがない湾内最深部で8mの防潮堤を波が大きく超えたというのだ。誰もがにわかには信じられなかったが、現実には襲って来たのだ。消防本部はパニックに陥った。

—応援要請—

3月11日16時16分、久慈消防本部は、被害の状況を岩手県災害対策本部に報告。同時に隣接する消防本部の応援と緊急消防援助隊の要請をした。更に近隣市町村の病院の確保、自衛隊、DMATについても併せて要請した。

—ライフライン壊滅—

地震と津波に呆気にとられていると、間もなく外は薄暗くなってきた。この聞ひっきりなしにあちこちから被害情報、行方不明者情報が舞い込んでくる。当本部の消防力を既に超えていると判断された。加えて市内全域が停電となった。消防庁舎は非常用自家発電設備があるため一時を凌げたが、町全体は真っ暗である。信号は止まり交通が麻痺している。スーパー、コンビニ、ガソリ



津波で壊滅した野田村中心部



一階が浸水破損した野田分署庁舎

ンスタンドが営業していない。食料が確保できない。水が出ない。トイレが使えない。電話が通じない。家族に連絡が取れない。家に帰れない。日常が異常化してしまった。

—消防施設の被害—

消防関係で特に危惧されたのが管轄分署である野田分署との連絡が取れなくなったことである。消防車両無線で野田村壊滅状態の発信後、音信不通となった。実態をつかめないため職員を派遣した。しかし、行った先の情報もなかなか入らない。野田分署が津波で浸水し、避難を余儀なくされたため無線固定局が使用不能となっていたのである。更に、被害地域広範となったことから各署所、消防車両から無線交信が輻較(混信)し統制ができない状態となり、これには通信指令室もお手上げとなった。なお、衛星携帯電話は後々まで通信手段として非常に有効であった。

—緊急消防援助隊—

3月12日13時12分、浜松消防局防災ヘリ「はまかぜ」が久慈地区空中消火等補給基地に着陸し、久慈広域担当の緊急消防援助隊指揮支援隊の隊長、副隊長2名が到着した。早速消防本部で被災状況を説明した。挨拶もそこそこに被害状況を確認するため被災地の調査に向かった。16時50分には管内で最も被害の大きかった野田村に入り、警察、自衛隊、役場、地元消防団、消防本部との対策会議に参加している。その後指揮支援隊本隊5名が到着、以後15日間久慈消防本部を拠点とし緊援隊としての活動が開始された。

当消防本部への緊急消防援助隊応援県隊は、静岡県浜松指揮支援隊他、北から青森、栃木、石川、佐賀、長崎、沖縄の7県隊で、どの県隊も遠路か



広域連合長に活動状況を報告する
指揮支援隊長と消防長（久慈市長室）



各県隊長に活動方針を指導する指揮支援隊
(久慈消防本部会議室)



雪の中で活動する緊急消防援助隊

らの移動にもかかわらず、疲労の表情一つ見せず黙々と検索活動続ける姿は地元消防として非常に頼もしく感じた。各県隊の皆様の活躍、労苦はここでは書き記せないほど篤く有難いものでした。この場をお借りして緊援隊の皆様に感謝申し上げます。

—課題—

災害における消防活動の課題は、発生時から本日に至るまで日々テレビ、新聞等の情報で共有しているところであるが、敢えて消防の立場から次の課題を提言したい。

- ①孤立地との情報伝達網の確保
- ②海岸水門の完全自動閉鎖
- ③消防無線の輻射解除
- ④消防庁舎、通信施設の非常電源確保

列記するように情報伝達方法について特に問題があると感じた。折しも消防救急無線についてはデジタル化に向けた移行期であり、無線輻射については周波数不足が予てからの課題として挙げられており、情報収集の重要な手段であるが故早期改善を望みたい。

—終わりに—

当消防本部をはじめ、東日本大震災の被災地に対し、全国各地から心暖まるご支援ご協力をいただき深く感謝するとともに、日本国民の絆の深さを改めて感じました。

私たちは甚大な被害を受けてしまいましたが、今まで共存してきました海と再び同じ気持ちで向かい合い共存していかなければならないと思っております。そのために我々地元消防は、地域復興の支えとして、また、今後災害に強いまちづくりのため、強い意志を持って地域防災に取り組んで行かなければならないと思っております。